

黒川真頼頭注『新勅撰和歌集抄』（弄花軒祖能）五 〈翻字〉

平井啓子

凡例

一 黒川真頼が、弄花軒祖能『新勅撰和歌集抄』（八冊、縦26・8cm×横18・6cm、寛政十一年版）に朱墨（朱書と墨書は別筆）で頭注を書入れた、ノートルダム清心女子大学蔵黒川本（黒八B四七）を翻字したものである。

二 翻字は、頭注のある歌のみを抜き出しておこなった。今回は賀、驛旅を取り上げる。なお、印刷の都合上、ここでは頭注はそれぞれ注釈本文の後に〈頭注〉として掲げゴチックで示した。朱書はその部分を1線で示し、右に朱と記した。

三 歌番号は『新編国歌大観』第一巻所収『新勅撰和歌集』の歌番号による。

四 弄花軒祖能『新勅撰和歌集抄』本文については、適宜、大取一馬氏『新勅撰和歌集古注釈とその研究（下）』（思文閣出版）

を参照した。

五 漢字の字体は通行のものを用い、反復記号（）は「々」を用いた。また、適宜句読点を付した。

六 疑問と思われる箇所には、（ママ）と傍記した。見せけちと思われるところは・・とした。

七 祖能『新勅撰和歌集抄』の解題等については、翻字完了後に頭注者考察とあわせ記す。

翻字

題箋

新勅撰和歌集抄 賀驛旅 三[※]

新勅撰和歌集抄 巻第七

賀歌

後堀河院年号 貞永元年六月后の宮の御方にて始て鶴契退年といふ題を講せられ侍けるに

前関白光厳寺撰政道家公

鶴の子の又やしは子の末までもふるきためしを我世とやみん

(四四三)

和名抄子孫部云。爾雅云曾孫之子為ニ玄孫和名夜渡古愚案孫の子を曾孫ヒ、コといひ。其子を玄孫ヤシ、コといふ和名抄に委し。歌意は鶴は齡の長き物なるに。其やしは子の末までも経るといひかけて。かゝる長寿の旧例には誰も我世を見んとの義也。我は作者の我也。中宮は御女なれば帝の御子孫出生し給へは此作者の御為にも子孫の趣なれば。鶴の子の又やしは子なといひて。帝の御末くをかけて祝し給ふ心はえ有へし

りと云歟

寛治八年八月高陽院家歌合に月歌

周防内侍

常よりもみかさの山の月かけのひかりさしそふあめの下哉

(四四五)

時は秋なれば常よりも光さしそふといひて藤原家の繁栄を聞せたり三笠山は藤原氏の大祖のまします所也。いはひの

心はえある故に此部に入成へし

〔頭注〕さしそふはみかさの縁也

仁安三年撰政閑院家にて対松争齡といへる心を説侍ける

権中納言兼光藤原資長男

うつしうふる松のみどりも君が代もけふこそちよの始なりけれ

(四六〇)

〔頭注〕此君か世といふは君か齡もといふ心也。君か世といふに意み有所によりてみるへし

建仁三年正月松有春色といへる心をおのこともつかうま

つりけるに

前右大臣

常盤なる玉松かえも春くれば千世の光やみかきそふらん

(四六一)

古今しときはなる松のみとりも春くれば今一しほのいろま

さりけり

玉松は松をほめていふ。ひかりみかくは玉の縁也

〔頭注〕みかきそふらん。攻云みか、れそふらんなり。下二段

の詞を四段にいへる例いくらも見へたり。

八月山野に鹿たてる所

前関白

今ぞこれ祈りしかひよ春日山思へばうれしさをしかの声

(四七〇)

鹿はかひよとなくを。かひあるに寄りて。祖神に常に子孫の栄えを祈りしかひありて。今女御入内の幸を悦び給

ふよし也。絵は春日山野などを書く成へし。古今秋の、に妻なきしかの年越へてなど我恋のかひよとそなく。入内の女御は即御女也。

九月九日從一位倫子菊のわたをたまひておひの老こひ捨秋よと侍りければ 紫式部

菊の露わかゆはかりに袖ふれて花のあるしに千世はゆつらん (四七五)

詞書は菊のきせ綿を給ひて。是にて老をのこひ捨て若やくやうにと仰らるゝ也。歌意は菊は延齡の徳あれば。我身も若やくはかり袖ふれて其老せぬ齡を花の主にゆつり奉らんと我身よりも倫子の千世を願ふよし也。わかゆは若やく也。やくの反ゆなり。重陽に菊の花さかさる時あれば。綿を菊のかたちによりて菊にきせ其日の宴をなし給ふとそ

〈頭注〉わかゆは若かへる也

寛喜元年女御入内屏風十一月江辺寒芦鶴立

入道前太政大臣

ちよふべきなにはあしのよを重ね霜のふりは鶴の毛衣

(四八一)

古今 水くきの岡のやかたに妹とあれとねての朝けのしものふりしも

古今の霜のふりは、。た、霜のふりたるさま也。こ、は鶴の毛の霜のふりたることく芦間に白くみゆる意也。実のしもをも兼たり。鶴の毛衣芦のよを重ねなどに祝意を含めり
〈頭注〉霜のふりはと云は霜のふりさま也。此歌は霜のふりたる様なる鶴の羽立といふ也。

延喜六年日本紀竟宴歌菅田天皇七天皇也

西三条右大臣良相公也開院左大臣男

年へたるふるきうき、の捨ねはそさやけき光とをく聞ゆる

(四九〇)

題の意は。日本紀を講して後宴会をなすを日本紀竟宴といふ。此時其書の中の人の名を題にして。和歌を詠する事旧

例也。和漢合運録等に委し。歌意は日本紀を考るに。応神天皇五年冬十一月。伊豆国に科オホセて長さ十丈の船を造らせらる。試に海に泛に軽くして行ことはしるか如し。故に其舟を枯野と名付らる。同三十一年に朽て用ゆるにたへす天皇のたまはく。久為^ニ官用一切不^レ可^レ忘^トとて。其舟木にて塩をやかせ諸国にたまふ。其舟木の中にかにももえぬ木あり。天皇御琴に造り引給ふに。其^ノ音鏗鏗サヤカシテ而遠^ク聆ニ云々古きうき、の捨ねはそとは。久為^ニ官用一功不可忘の意也。うき、は舟を云也。下句は天皇の徳輝後代まで遠く聞えて高く尊敬し奉るよし也。即八幡宮の御事也。難注子。さやけきひ、きを。ひかりと写し誤れるなどいへるは。日本紀に其^ノ音鏗鏗とあるに泥み。又は光の聞ゆると有をいふかしく思ふ故成へし。古書に明^レ徳惟^レ馨シ。明^レ徳遠^ク聆ニなどいへるにて考へ知へし。和漢の書に比類いくらも有事也。詩歌の類は別にて多し。其根本をしらんとならは。春部にあたらず句ひを独なかめての歌の注にて明らむへし。一心か主人にて眼耳鼻舌等は。夫^ノの役人たる事に心の付さる故也。ひかりといへばとて。た、きら^ノする事斗のやうに思ふへからず。よし此歌もとはひ、き成とも。定家卿ひかりと改め給ふべく覚ゆ。抑ひ、きといふ詞は歌にも

よむ事なれと。一首の中にひ、きによりたることなくては聞にくき詞也

〔頭注〕

本

契沖かひ、きを写し誤れる成へしといへる正説也。さやけきひかり聞つかず。すへて此祖能といへる僧更に学問なくして契沖の説はよきことをは犯しとりて記しなから所々にわたれたいへることともいと悪むへし。歌の注とも此僧の説は一つとしてとるへき所あらず。

新勅撰和歌集抄卷八

羈旅歌

あすかかはらの御時近江にみゆき侍けるによみ侍ける

額田王從五位下大藏卿

秋の、におはなかりふきやとれりしうちのみやこのかりいほしぞ思ふ平 (四九六)

明日香河原宮は皇極天皇の都也。大和より近江の比良の宮にみゆきしたまひて。中途宇治の古宮に行宮をむすひて宿らせたまふ時の歌也。お花かりふきし宇治の宮の名残を思ふよし也。刈に借をかねたり。此歌万葉の一に出て一二句あきの、みくさかりふきと有

〔頭注〕刈に借を兼たりといふは例の注者の僻也。

芳野宮にみゆき侍ける時

持統天皇御製天智天皇

みよしの、山下風の寒けくにはたやこよひも我独りねむ

(四九七)

此歌万葉一に出て大行天皇御製とあり。大行天皇とは。天子崩御ありていまだ諡号を奉らぬ程に申事とかや。歌意は明也。はたは又也。秋上に委し。難注に万葉を引て。歌から女帝めかすなどいへど。万葉も誤りはすくなからず。古歌には女の歌にもかやうによめるもまゝ、有事也。其上当時に伝る所の万葉集。必しも定家卿以前の正本ともいひかたぐ。且類本も多かりし趣也。博学をふるまふ注釈ともは。毛をふきて成とも疵を見出さんとするは。いともわりなき事なるへし。此歌夫木抄にも出て御作者は持統天皇也

〔頭注〕男の女になり女の男になりてよめる歌もあり。大やうにみて置へし。

鞆中暁といへる心をよみ侍ける

入道前太政大臣

旅衣たつ暁の鳥のねに露よりさきも袖はぬれけり (五一〇)

暁は露の深き時也。歌意は旅の道の露よりも。まつ涙に袖

のぬる、よし也古郷の遠さかるを思ひ。行さきの苦しさを思ひ。又は旅宿の名残などをおもふ意成へし

〔頭注〕前後の歌の並ひをおもへは此歌も今立いつる時の歌なるへし。されとも題の鞆中とあるに叶ひかたき様なれ

と大やうにみて置へき歟。

別れ行かけも留らず岩清水逢坂山は名のみふりつ、(五一一)

古今1かつこえて別れもゆくかあふ坂は人たのめなるな

こそありけれ

須磨卷 別れてもかけたに留る物ならばか、みを見ても慰

てまし

名のみふりつ、とは。逢坂といふ名はかり徒イカツによ、に聞え

ての意也。影は清水に對し。留らずは関ある逢坂にかけて

見るへし。岩清水は逢坂山の岩間の水を云

〔頭注〕拾遺集 あふ坂の関の清水にかけみえて今やひくらむ

望月のこま

頼通公 宇治関白有馬摂津有馬郡の湯見にまかりける道にて秋の暮をおしむ

歌よみ侍けるに

権大納言長家

神なひのもりのあたりに宿はかれ暮行秋もさそとまららん

(五一六)

宿はかれとは。暮行秋も旅宿をとらは。此所に宿はかれと秋にいふ意成へし。この神なひは津国也。古今旅部に源のさねを山崎より神なひの杜まで送る事あり。其神なひのもり成へし

〔頭注〕 伴なはれし人に神なひの杜に宿をかり玉へといひて其

ゆへは秋も此ところにとまらんと思へはなりと下句にて尺したる歌ならん歟。

式子内親王

あら磯の玉藻の床にかりねしてわれから袖をぬらしつる哉

(五二二)

古今 1 あまのかるもにすむ虫のわれからとねをこそなかめ

よをは恨みし

玉藻の床はた、藻などをしきて。あら磯にかりねするをいふ

〔頭注〕 われからの詞を出さんとていへる上句なり。

真昭法師

月の色もうつりにけりな旅衣すその、萩の花の夕露 (五三〇)

月の色もうつるとは。旅衣か萩の花摺になる故に月の色もうつりにと云也。一二句は小町の花の色はより出て旅に日数をふる意也

〔頭注〕 おほろに霞し月の夏より秋にうつり来たるこゝろなる

へき歟。

よをのかれて後修行のついでにあさか山典をこえ侍けるに昔のこと思ひ出侍りてよみ侍ける

蓮生法師 宇都宮縣三郎頼綱也 佐兵衛督兼綱男

いにしへの我とはしらしあさか山見えし山井の影にしあらねは

(535)

万葉十一 1 あさか山影さへみゆる山の井のあさき心はわか

おもはなくに

むかしの俗体にあらねは。山の井も我とはしらしと也

〔頭注〕 あさか山本を若き時見て後老て又見し也

旅の心を讀侍ける

前大僧正慈円

かへりこは重なる山の峰こととまる心をしほりに本はせん

(五三六)

又立かへりこは。今日にとまる峰くを。道しるへにせん
と也。独身の旅行によく有事也。しほりは目しるし也。栗
が本字成へし。夏書ニ随山ニ葉ニス木ヲ云々

惟高のみこのかりしけるともにひこる侍てかへり侍ける
を猶と、め侍ければよみ侍ける

業平朝臣

枕とて草引結ふこともせし秋のよとたに頼まれなく(五三八)

草枕引むすふこともせじ。短夜の比にて。秋の長きよとは
頼まれぬにとの意也。なくの反ぬ也。三月つこもり歌也全
意伊勢物語に見るへし

〈頭注〉秋ならば一夜あかでも其詮あるへきに春の夜なれば程
なくあけてと、まりたる詮もなしと也。

難波にみゆき侍ける時よめる

ワキツクメノアツマビト
置始東人 万葉作者

大伴の高しの濱の松かねを枕にぬれと家しおもほゆ(五三九)

万葉一に出。大伴の高師濱は。祇注曰津の国也。同し時大
とものみつの濱ともよめり。歌意はかゝる珍らしき旅寝に
も。猶我宿をおもふとなり。大伴の高しとつ、く事。冠辞

考に説くをしるせり

〈頭注〉本松かねは松ガ根

(ひらいけいこ／平成一四年度博士後期課程修了)